

St. Luke's International University Repository

Current Status and Issues of the Final Practice Team Challenge: Aiming to Promote the Transition to Fresh Nurses

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅田, 美和, 笠井, 愛, 西野, 理英, 岩崎, 寿賀子, 鈴木, 千晴, 柳橋, 礼子, 佐居, 由美, 長松, 康子, 三浦, 友理子, 林, 直子, 小林, 京子, 川端, 愛, Asada, Miwa, Kasai, Ai, Nishino, Rie, Iwasaki, Sugako, Suzuki, Chiharu, Yanagibashi, Reiko, Sakyō, Yumi, Nagamatsu, Yasuko, Miura, Yuriko, Hayashi, Naoko, Kobayashi, Kyoko, Kawabata, Ai メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00000129

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



卒業実習チームチャレンジの現状と課題

～新人看護師への移行の促進を目指して～

浅田 美和¹⁾ 笠井 愛¹⁾ 西野 理英¹⁾ 岩崎寿賀子¹⁾ 鈴木 千晴¹⁾ 柳橋 礼子⁴⁾
 佐居 由美²⁾ 長松 康子²⁾ 三浦友理子²⁾ 林 直子²⁾ 小林 京子²⁾ 川端 愛³⁾

Current Status and Issues of the Final Practice Team Challenge —Aiming to Promote the Transition to Fresh Nurses—

Miwa ASADA¹⁾ Megumu KASAI¹⁾ Rie NISHINO¹⁾ Sugako IWASAKI¹⁾
 Chiharu SUZUKI¹⁾ Reiko YANAGIBASHI¹⁾ Yumi SAKYO²⁾ Yasuko NAGAMATSU²⁾
 Yuriko MIURA²⁾ Naoko HAYASHI²⁾ Kyoko KOBAYASHI²⁾ Ai KAWABATA³⁾

[Abstract]

We developed “The Final Practice: Team Challenge” for the 4th year students (3 units) in 2018. The purpose of the challenge was to facilitate the transition from nursing student to professional nurses. We achieved this by providing them with hands-on experience in multitasking, prioritization, self-evaluation, and teamwork. This practice was designed to let students experience the clinical tasks that new nurses face in a step-by-step manner. The students were supervised by the Clinical Specialist of the hospital, as well as faculty from each department of the university. The students were allowed to decide where they practiced. In 2018, students practiced in 8 different sites comprised of 4 internal medicine wards, 2 surgical wards, the Intensive Care Unit and the emergency room. The students experienced caring for multiple patients, working in teams, and working night shifts. Sixty percent of the clinical nurses working the sites where the students practiced reported a positive result from this practice. The students were able to demonstrate the required skills proving the effectiveness of this practice. However, the nurses also commented that the practice was not effective for students who were less accomplished their learning task of the university.

[Key words] clinical training before graduation, night shift, baccalaureate nursing education, Integrative practicum, unification

[要 旨]

本学では2018年度より「卒業実習チームチャレンジ」を開講している（4年次選択科目，3単位）。本科目は、「新人看護師が経験する多重課題，優先順位の決定，および自己の力量推定と的確な救援の方法を実習し，看護学生から看護師への移行を促進するための実践能力と資質を養う」ことを目標にし，「チームメンバーの一員として新人看護師が1年目に経験する状況に段階的に近づけるように工夫した」実習を行うものである。また臨床教員と大学教員（各大領域より選出）とが合同で科目を担当することも特徴である。学生が関心の高い領域を選択し2018年度は，内科系4病棟，外科系2病棟，集中治療室1病棟，救

-
- 1) 聖路加国際病院看護部・St. Luke's International Hospital, Department of Nursing
 2) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
 3) 東京医科大学医学部看護学研究科・Tokyo Medical University, School of Nursing
 4) 常磐大学看護学部看護学科・Tokiwa University, Faculty of Nursing, Department of Nursing

急外来の8ヵ所で実習を実施した。本科目を通し、学生は「複数患者の受け持ち」、「チームでの協働」、「夜間の看護」について学習を深めていた。実習受け入れ病棟の看護師のアンケートでは、約6割の看護師が「看護学生から新人看護師への移行を促進することができる実習だった」と回答し肯定的な意見が得られた一方、学生の準備状況等についての課題も挙げられた。

【キーワード】 卒前教育、夜間実習、看護基礎教育、統合実習、ユニフィケーション

I. はじめに

平成23年、「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」¹⁾において、看護学士課程における人事育成の方向性が示された。これは、専門職能力開発に努めること、あらゆる場や健康レベルの利用者のニーズに対応できる応用力を有すること、国際性豊かな人材であることが織り込まれており、看護基礎教育において看護実践能力を育成するカリキュラムを構築していく必要性が示された。平成29年には、文部科学省による看護学教育モデル・コア・カリキュラムが提示され²⁾、看護実践能力の育成を見据えた学士プログラムの各大学における実装が期待されている。

本学では2014年に、大学と病院が法人一体化したことを契機に、大学・病院において学部実習の協働体制を強化し、より臨床実践能力の高い看護師の育成を目指してきた。また2015年度のカリキュラムの改訂に伴い、実習単位数の増加とともに、看護学生から新人看護師への移行を容易にすることを目的に、2018年度に「卒業実習チームチャレンジ」が新たに開講した。この実習の目的は以下のとおりである。

看護学生から新人看護師への移行を促進するための実践能力を養うことができる。

新卒看護師が経験する、多重課題、様々な時間帯の看護、ならびにチームでの協働を実践し、優先順位の決定、支援のもとめ方、情報共有方法、省察について学び考察を深める。

本科目は、4年生までの実習を通じて習得してきた看護実践能力を基盤に、より臨床看護実践に近い状況下でチームメンバーとして実習することを通して、ケアや協働する力を発展させることを目指し、新人看護師への橋渡しの位置づけとなっている(図1)。

II. 実習開講に向けての準備

実習開講に先立ち、2016年度より大学・病院でワーキンググループを結成し準備を開始した。まず実習時期について検討し、移行期教育という本実習の特徴から年度末の12月の実施とし、これに伴い、卒業論文の締切を12月から11月に移行した。また履修学生の関心に応じた実

習場所を確保するため、病院内の全部署(31部署)で実習が行えるよう準備した。学生が実習部署を選択する際の参考資料として、病院側で部署の看護の特徴をまとめた部署紹介文を作成し、学生がこれまで実習を行っていない部署にも関心を持てるような工夫を行った。

大学では、全学的な理解と協力を得るため、全体説明会を実施し、教育職員ミーティングにて毎月、進捗の報告を行った。病院では、これまで実習が実施されていない部署での実習も想定されたため、ナースマネージャー会にて定期的に説明を行い、周知を図った。さらに病院のナースマネージャーを全員、臨床准教授とし、その中から選出された臨床教員と、各大領域から選出された大学教科目を担当した。チームチャレンジ教員チームでは、定期的にミーティングを開催し、実習の実施に向け詳細な内容・方法を検討した。たとえば、夜間実習における病院側の支援体制の構築、夜間実習中の学生の休憩場所の確保、部署スタッフへのオリエンテーションの実施、学部実習担当者会との連携等の細かな調整を行った。

III. 実習の実際

1. 履修生の募集

2018年4月に4年生全体に、チームチャレンジ教員チームによるオリエンテーションを実施し、8月初旬に履修登録を締め切った。学生が関心の高い領域で学ぶことができるよう、学生には実習希望部署の提出を求めた。そ

卒業実習チームチャレンジ:学生から新人看護師へ

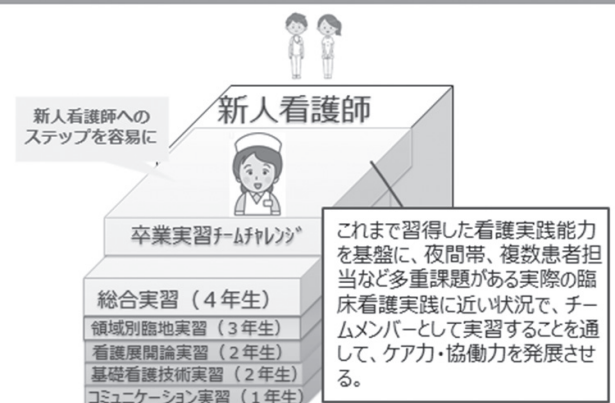


図1 卒業実習チームチャレンジの位置づけ

の結果、8名が履修を希望し、内科系4病棟、外科系2病棟、集中治療室系1病棟、救急外来の計8ヶ所での実習が企画された。

2. 実習方法

1) 実習期間

実習期間は、2018年11月26日～12月19日の計3週間で、最初の1週間はフィールドワーク・学内での演習で、後半2週間が病棟実習である。

2) 実習内容の概要

本実習では実習部署の特性を踏まえ、さらに新人看護師が入職時に経験する状況に段階的に近づけるように、実習の内容・方法を工夫している。1週目はフィールドワークを通して、学生自身で実習計画書を作成する。まず実習部署で1日半のシャドーイングを行い、その部署の特性や、看護師の業務スケジュールを把握する。その情報をもとに病棟看護師に相談のうえ、実習計画・実習目標を立案する。さらに、2週目以降の病棟での実習の際に使用する担当患者のアセスメントに関する記録や、1日の行動計画を立案するのに必要な情報収集に関する記録などを学生自身が作成する(表1)。

2週目以降は、日中だけでなく夜間(準夜・深夜帯)や遅番などを含む看護師と同様のシフトで実習を行う(図2)。学生が受け持つ患者の人数や、患者の病態・重症度などは、学生の実習目標にあわせ、実習部署のナースマネージャーや学部実習指導者と相談しながら決定する。実習期間中、学生をプリセプターのように支援する担当者を配置する部署もある。

3) 実習目標の立案

本実習の特徴のひとつに、学生自身が部署の特徴を捉えたうえで、焦点をあてて学びたいことを決定するという点が挙げられる。そして、このプロセスに大学教員だけでなく、臨床の看護師が関わることで、より臨床的な視点での学習目標の設定が可能となる。実際に学生が立案した学習目標の一例を表2に示す(表2)。

4) 実習記録の作成

学生が実習中に記載する行動計画、患者の状態を把握するための記録などのフォーマットは自由形式としている。学生は1週目のフィールドワークを通して、実際の臨床現場の看護師が複数患者の情報をどのように把握し、統合しているのかを知り、さらにこれまでの臨地実習を通して学んだ知識や経験を活かし、記録用紙を作成する。たとえば、患者の1日のスケジュールと、学生が実際に行う行動計画を時間軸に沿って記載できるようなタイムテーブルや、術後患者の観察を効率的に適切に行うため

表1 実習方法

1 週目：フィールドワーク	
1 日目 8:30～11:40	実習オリエンテーション(教員からの説明とワーク)
2 日目 8:30～15:00	実習部署でのフィールドワーク(部署の特性・スケジュールを知る、各自焦点をあてた看護活動の観察)
3 日目 8:30～12:00	実習部署でのフィールドワーク(各自焦点をあてた看護活動の観察)
3 日目13:00～15:00	実習計画書の作成(実習時の記録用フォーマットの作成も含む)
3 日目16:00～	実習部署と実習目標に関する相談
4 日目 自己学習	
5 日目 8:30～11:40	フィールドワークを通して学んだこと、実習計画の発表
2・3 週目：部署での実習	
各部署での実習は8日間(実際の実習スケジュールは図2参照)	
学内中間カンファレンス	
最終プレゼンテーション	

		第2週							第3週								
12/	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	
	D	D	J	N	D	中間 カンファ	D'	D	D					学内	学内	最終 プレゼン	
受持人数	1人受持+シャドーイング		2人受持+シャドーイング					3人受持+シャドーイング									

図2 実習スケジュールの一例

表2 学生の実習目標の一例

内科病棟での一例	<ul style="list-style-type: none"> ●複数患者に対する個別性を生かした看護実践に関して、自身が実習時間でできることと困難なことを把握し、実践するための方法を考察できる。 ●夜間の患者の様子と必要な看護を理解し、日中の看護計画につなげることができる。 ●夜間において働く際の看護業務の実際と、看護師の動きのイメージをつかむ。
外科病棟での一例	<ul style="list-style-type: none"> ●手術出し・迎え、迎えた後の術後の経過観察を、必要な支援を求めながら自立して実践することができる。 ●夜勤の看護業務を理解し、自分のできることを探し実践する。

のフォーマットなどを作成した(図3・4)。記録用紙は実習中に使用しながら、適宜改訂を加えていった。

5) 複数患者受け持ち

病棟系の実習では、最初は1名の受け持ちからはじめ、徐々に受け持ち患者を2～3名に増やすように計画した。

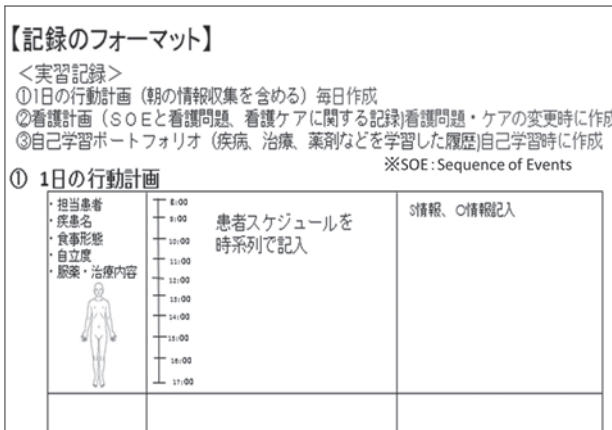


図3 実習記録の一例（1日の行動計画記録）

受け持ち患者が1名の時には、空いている時間を指導担当の看護師と一緒に動くことで、担当看護師の受け持つ他の複数患者を含めた優先順位の考え方や適切なスケジュールの立て方を学び、実際に自分で複数名を担当するための準備ができるようにした。外来系では、似たような疾患・治療を受ける患者を複数名担当できるようにアシメントの工夫を行った。

3. 実習における学びの内容

1) 複数患者受け持ち

複数患者の担当は、本実習で初めて経験した学生がほとんどであり、複数患者を担当するうえで重要となる優先順位の判断ポイントについて理解することができた。特に優先順位の判断には、担当患者それぞれの重症度や、実施することからの緊急度の高さを検討することや、時間通りに実施しなければならない薬剤投与、検査・手術出し等をスケジュールに組み込むことの必要性など、他の実習では経験することがない臨床現場特有の実践を通して、学びを深めることができた。また学生ひとりでは対処することが難しい多重課題の状況に直面することで、学生自身が自分の力量を知り、周囲に適切に支援を求め

ることの大切さを理解することができた。

さらに複数患者を受け持つためには、必要な情報を効率よく収集し、その日の行動にタイムリーに活かすことが必要であるという経験から、初めて受け持つ患者の情報収集方法を習得した。電子カルテの膨大な情報の中から優先的に収集すべき内容と、そうでない事柄の判断について、臨床看護師の視点で学習することができた。また複数患者を担当する場合には、似た疾患・治療の患者を担当することで、情報収集や必要な観察事項などを繰り返し実践でき、実習後半には学生が自信を持って、自立して実践できることが増えていった。

外来では、意識レベルの確認、バイタルサインズの測定、12誘導心電図検査の実施、エンゼルケア、患者・家族の不安の傾聴など、学生が実施できることに積極的に取り組み、実習期間中に述べ40名の患者と関わった。その中で、毎日1名の患者の看護問題に焦点化しSOAP記録を記載することで、臨床判断のプロセスを確認することができた。似た症状であっても、疾患によって適応となる治療法が異なること、治療までの時間が成果に大きく関わること、重症度と緊急度の判断、検査や処置の実施にも優先順位の判断が必要であることなどを学んでいた。

2) チームでの協働

学生は実習での経験から、看護師同士が様々な場面・手段でタイムリーに情報共有し、協働を通して病棟の全体像をつかみながら働いていることを学習した。そして、チームでの協働のために効果的なコミュニケーションについて、具体的な方法を理解することができた。特に学生が協働を意識して実践したコミュニケーション方法は、「自分ができる範囲を看護師に具体的に伝える」ことや、「看護師に報告すべき事柄を判断し、分かりやすい言葉や手段で伝える」ことなどである。さらに実習後半には、多くの学生がナースコールに対応し、学生にできる範囲の中で必要な行動をとることができていた。この経験を通し、学生はチームの役に立っていると認識でき、「チームでの協働」を強く体感していた。また患者は、様々な医療職の中で看護師には思いを伝えやすく、多職種との橋渡し役になるということも、具体的な場面の経験から学習していた。

3) 夜間の看護

ほとんどの学生が夜間実習の経験は初めてであり、夜間の患者・病棟の様子を知ることができた。特に夜間ほどの部署でも勤務する看護師数が少なくなるため、重症患者やせん妄・転倒リスクのある患者の情報を勤務開始時に勤務者全員で把握し、対応していることを学習した。また夜間帯は患者の不安が表出されやすい時間であるこ

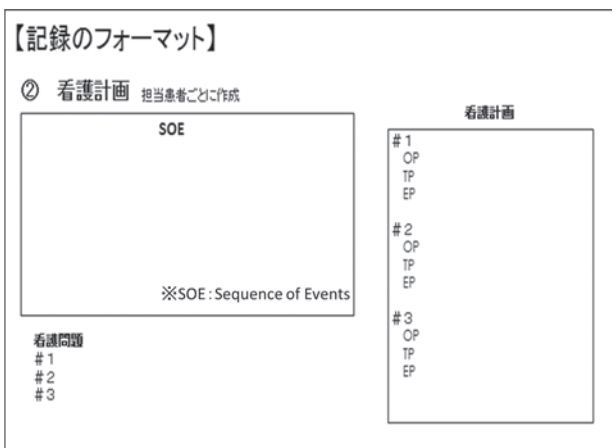


図4 実習記録の一例（看護計画記録）

とを体験し、看護師が短い時間でも患者に寄り添う関わりをしていることを学習した。さらに、夜間の過ごし方は患者ごとに異なり、患者一人一人のリズムに合わせたタイミングでの看護の提供のあり方を知ることができ、昼間も含めた生活リズムを整えることの重要性を理解することができ、昼間とは異なる看護の特徴を学習した。

IV. 実習の評価

1. 実習の評価

1) 学生からの評価

学生対象の科目評価アンケートは、受講生 8 名に配布し、7 名から回答を得た（回収率87.5%）。科目満足度は、10段階評価で8.6点であった。

学生からは、「『こういう実習がしたかった』という実習だった。3年生の時は看護計画や記録を書くのに一杯で、自分が（チームの中で）何をしているのかわからなかったが、今回は自分がどこまで出来るのか出来ないのかが具体的に見えた」「多重課題に追われ時間の制約もある中で、業務に支障を来さずに、患者さんの話をじっくり聞いて側にいる関わり方は可能だろうか、と考えることもあったが、実習を通して時間の使い方、知識や技術の向上によって可能になるのではないかと思えた」といった感想が最終プレゼンテーション後に聞かれた。

なお、科目評価アンケート結果と感想の公表については、学生の許諾を得ている。

2) 看護師からの評価

実習を受け入れた全 8 病棟のナースマネジャーにアンケートの協力を依頼し、55名の看護師から回答を得た。本科目の目的である「看護学生から新人看護師への移行を促進することができる実習だった」という問いには、約 6 割のスタッフが「そう思う」と回答している（図 5）。また「本実習を受け入れたことで、4月から新人看護師をチームの一員として受け入れる準備ができた」と

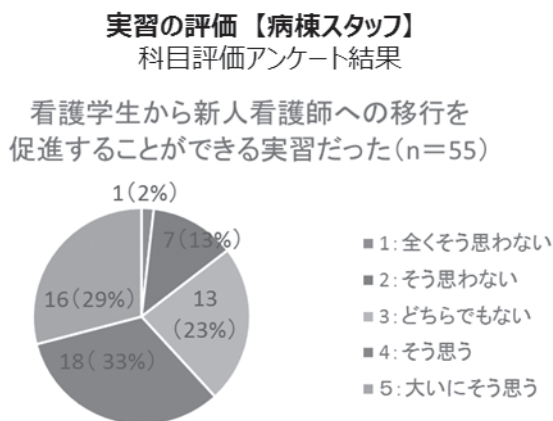


図 5 看護師対象の科目評価アンケート結果①

という問いでは、50%のスタッフが「そう思う」と回答している（図 6）。自由記載欄への回答には、本実習の意義について肯定的に評価している声が多く挙げられた一方で、学生が本実習に取り組むにあたっての基本的な準備状況に関する課題も指摘された（表 3）。

なお、アンケート結果の公表については、回答者の同意を得ている。

V. 考察と今後の課題

学生のアンケート結果からは、本科目に対する学生の満足度は高く、学びの内容からも本実習は一定の成果があったと考える。特に移行教育という観点においては、臨床現場での実践に近い実践ということが重要となる。本実習の具体的な方法や学習内容は、学生自身の興味関心と、病棟の実習担当の看護師や管理者の裁量に任されているという点が特徴であり、このことが、より現実の臨床実践に近い形式での実習を可能にしていると考えられる。

また学生は、複数患者受け持ちという初めて経験する状況についても、似たような病態・治療の患者や、状況を繰り返し経験することで、特定の状況下において、自信を持って自立して実践することが可能となっていた。これは、部署に配属されたばかりの新人看護師への教育

表 3 看護師対象アンケート自由記載欄の抜粋

- ・学生が主体的に病棟スタッフと関わっていた。
- ・学生と一緒に働きたいと思った。
- ・この実習をすることで実習や座学と臨床とのリアリティショックが少しでも減るのではないかと思った。
- ・夜勤・遅番などもあり、「新人看護師」を体験する意味では良い実習だと思う。
- ・チームの一員として、受け持ち患者以外のナースコールにも対応し、他スタッフへすぐ報告してくれ助かった。
- ・病態生理など何もできていない中で、何を学びに来ているのかわからない
- ・シャドーイングしている期間が長く、実際に自分で実践する期間があまりなかったように感じた

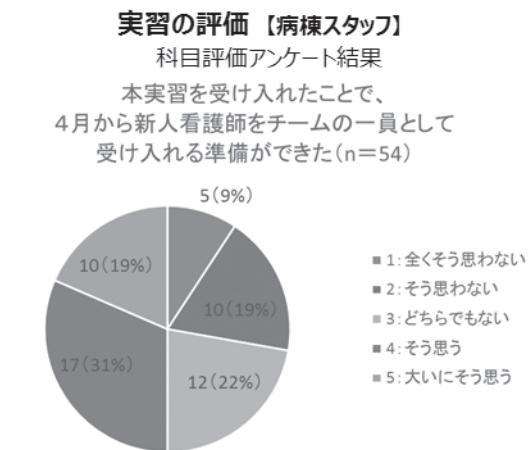


図 6 看護師対象の科目評価アンケート結果②

における応用も可能だと考える。

チームでの協働という点では、学生はチームメンバーから感謝されたり、チームの役に立っていると感じられる経験を通して、学生という立場であってもチームへの帰属意識を得て、さらにはその意識を高めることができていた。つまり学生がチームメンバーとしての役割を持ち、行動できるような環境を作ることも重要な点であるといえる。またこのことから、新人看護師が入職後早期に、「チームに貢献できる体験」を積み重ねることが職場適応を促進する可能性があると考えられる。

就職前に、実際の臨床実践に近い経験をするのは、現実的職務予告となり、就職後のリアリティショックを低下させる可能性があると考え、この点については継続して評価していく必要がある。

今後は、本実習の効果をさらに広げていくためにも履修者数増加を目指した方策の検討が必要である。今回の履修学生の経験を踏まえたうえでのオリエンテーションや学内での広報活動などを検討していきたい。また履修生が増加した際には、大学・病院側のサポート体制につ

いては再考する必要がある。病棟スタッフへの実習に関するオリエンテーション方法や、学習状況を共有するための方法については、さらなる改善を目指していきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告 平成23年3月11日 [Internet]. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afiedfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf [参照 2019-09-15].
- 2) 文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～平成29年10月 [Internet]. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2017/10/31/1217788_3.pdf [参照 2019-09-15]